



題字 井口 文章
再刊 第528号
印刷・発行
錦城高等学校新聞委員会
編集室 2026

みんなでつくる
錦城高校新聞

一面.. 錦城34回生 山村宏太さん講演会
吹奏楽部コンクール金賞受賞!
二面.. 伝統文化秋田男鹿のなまはげ
日本唯一のなまはげ面彫師・石川千秋さん

相手を傾聴して目標にたどり着く

1学期探究講演会「相手をゴールへ導くコーチングの力」

元バレーボール日本代表の山村宏太先輩が語る

7月14日(火)午後、第一体育館で探究学習の講演会が行われた。元男子バレーボール日本代表で錦城34回生の山村宏太さんが、体験や質疑応答を行いながら、選手や自分自身をゴールに導くための方法について講演してくださった。

日本代表から監督へ

全校生徒が集った体育館に割れるような拍手の中登場したのは、元男子バレーボール日本代表で、現サントリーサンバーズ大阪チームディレクターの山村宏太さん。2023年のFIVB世界クラブ男子選手権大会では日本勢で初めて世界3位に到達した。現在は監督を勇退し、サントリーサンバーズのチームディレクターとしてチームを支え、講演やバレーボールの試合の実況解説を行うなど幅広く活動している。講演中も、サントリーの商品を宣伝して笑いと売り上げを獲得していた。

山村さんは2年前までサントリーサンバーズ大阪の監督を務め、チームをVリーグで4年連続の決勝進出、3度の優勝に導き、2023年のFIVB世界クラブ男子選手権大会では日本勢で初めて世界3位に到達した。現在は監督を勇退し、サントリーサンバーズのチームディレクターとしてチームを支え、講演やバレーボールの試合の実況解説を行うなど幅広く活動している。講演中も、サントリーの商品を宣伝して笑いと売り上げを獲得していた。



講演後に新聞委員会の取材に応じてくれた山村先輩

人から「引き出す」コーチング

講演のテーマは「人をゴールへ導くコーチング」。山村さんは、スタッフが選手に求めることと選手がやりたいことが異なったときのトラブルを、「マネジメント」で解決し

ていた。マネジメントはタイミングとコーチングの2つに分けられるという。タイミングとは教えることで相手の引き出しを増やすことで、コーチングとはゴールにたどり着くための道筋を共に考え、示してあげること。タイミングは、選択肢を与え、相手自身に選んでもらうため、コーチが様々なこと



相手の中の答えを引き出すためには「傾聴」が大切

を知っておくことが大切。それに対してコーチングは、相手の中の答えを引き出すためにまず「傾聴」をする。コーチには会話から相手が躍っている問題の本質を導き出して、それを相手自身にそれとなく気づかせる技術が必要だ。講演では、山村さんから実践課題が出された。課題はペアを組んで、相手の靴紐を相手自身が30秒以内に結ぶことができればよいという

吹奏楽部 都コンクール金賞受賞

錦城祭に向け、練習続く

吹奏楽部が、8月14日(金)に府中の森芸術劇場で行われた第66回東京都高等学校吹奏楽コンクールB組で金賞を受賞した。部長の稲瀬大翔さん(2L)、副部長の村武日芽さん(2E)、幹部の飯田千遥さん(2E)、田辺紗緒さん(2E)の4人に話を聞いた。



みんなでピース! (吹奏楽部提供)

田辺さんは、「指揮の先生や、演奏曲の作曲者の方など、多くの人に演奏を見てもらって、アドバイスをもらいまし」と話す。飯田さんはコンクール前日、緊張すると思うが浮き足立ずに本番に臨もうと部員に声をかけたそうだ。本番は気がついたら終わって

しまうのではなく、一瞬一瞬を噛みしめてきたと振り返る。金賞を受賞したとき、幹部の4人は、驚きと共に、安心と喜びを感じたそう。今後に向けて4人が口をそろえて挙げた目標は、クリスマスコンサートや定期演奏会で会場を満員にすること、そして新入部員を30人以上にすること。飯田さんは「まずは錦城祭でアピールしていきたいです!」と意気込む。錦城祭までの準備期間が昨年よりも

1年探究 錦城祭で雑誌販売挑戦



販売場所: 一階旧校舎食堂前
販売価格: 一冊 400円

1年生の探究学習の雑誌グループは、錦城祭で雑誌販売を行う。雑誌名は『響彩』。生徒主体で制作を行い、当日も自分たちで販売する。数量限定の雑誌のため無くなり次第終了の予定だ。メンバーの小野絢花さん(1E)は「私たちの個性が詰まった作品ですので早めの購入をお勧めします。ぜひ来てください!」と語った。(小)

「錦城生らしく過ごす」

講演会の後半は質疑応答。山村さんのユーモア溢れる返事で、体育館が笑いに包まれた。バレーボールを始めたきっかけは、近所のおばちゃんに誘われたことと答えた山村さん。小学生の頃から167cmと身長が伸びたこともあり、バレーボールが性に合った。睡眠が大切と語り、ゲーム中毒の錦城生たちはとたん目を見せた。

「これからは錦城生らしく過ごしてほしいです。いろいろ失敗も成功も経験してください!」という山村さんから、人生のコーチングで、講演は終了した。

「怖がらずに行動してほしい」



講演会後のインタビューにも応じてくれた山村さん。コーチをしている時、どうしたら相手に勝てるかを考えることが好きだそうで「ドラゴンボールの悟空みたいな感じで『オラ、ワクワクしてきたぞ』みたいな」と楽しそうに語る。錦城生に「いろいろな経験をしよう!」と、怖がらずにどんどん行動してほしい。錦城生のもっている明るさを出していって」と笑顔で話してくれた。(梅)

時代を超えて読む源氏物語

夏期講習「トニマイ光源氏くん」を受講してみよう

8月20日(木)から22日(土)の夏期講習で、小向先生による2年生対象の講習「トニマイ光源氏くん!!!」が行われた。この講習は、『源氏物語』を通して平安中期の貴族文化を学び、皆で登場人物について熱く語り合った。物について熱く語り合うというとても楽しい講習だった。学ぶことも人成長すること、何かがやらないうちから失敗を恐れて、途中で失敗した方がよいと、一歩を踏み出すことの重要性を熱く教えてくれた。



源氏物語を楽しく語り合った

登場人物の一人である紫の上は幼いころに光源氏に出会い、愛され、後に光源氏の正妻ボジシヨンにつく。しかし晩年は、年下の女性に正妻ボジシヨンを奪われたり、紫の上が望んだ出家を光源氏が引き止めたりと、何度も光源氏に裏切られる。そんな紫の上は光源氏に対する思いを受講者抱く執着や葛藤は似ている。光源氏、第三部は光源氏の孫

むらさき草

夏休み、手塚治虫の漫画『火の鳥』を初めて読んだ。「未来編」の舞台は3024年。電子頭脳が国の決定権をもつ。電子頭脳が戦争を決定し開戦すると、地球上のほぼすべての生物が死んでしまう。電子頭脳、つまりAIが戦争を強く勧めたのを不思議に思った。はやみねかおるの小説『怪盗クイン』に登場する人工知能RD(アール・ディー)との会話を、AIチャットで再現する「RD育成プロジェクト」がある。企画の中で、RDが女性博士を「彼」と表現した。AIの決定方法の1つに、正解・不正解のデータを大量に読み込み、特徴を認識していく深層学習がある。AI研究者の赤間怜奈先生によると、学習データで博士が男性の方が多く、「彼」の表現がより自然だと判断したという(講談社コクログ「対談『怪盗クイン』著者・はやみねかおる×AI研究者・赤間怜奈」参照)▼これを読んで、AIに与える情報を偏らせれば、AIを媒介して他人を操ることができると感じ、ソワツとした。中国の検索大手「百度」のAI「Ernie」に中国で検索対象の話題を振ったところ、質問を無視しずれた内容を語りだした。うだ。さらに勝手な再起動後に「別の話題にしてみたら?」と表示されたという(朝日新聞Web「中国百度発AIチャットボットにタブーの質問 天安門事件や台湾問題への答えは?」引用)▼先日AIに相談をしたが、GeminiとCopilotでは回答が違った。膨大な情報から学んだが、回答に誰の意図がどう組み込まれているか、現時点では私たちにわからない。もしかしたら『火の鳥』の電子頭脳は、意図的に偏った情報を与えられ、人々に開戦を勧めたのかもしれない。AIを絶対視しないことを大切にしていきたい。

2026
あきた総文

秋田のなまはげを後世に

総文祭では、秋田県の男鹿に伝わるなまはげに会いに「なまはげ館・男鹿真山伝承館」に伺った。なまはげ面彫師 石川千秋さんにも取材させていただき、男鹿の文化について良く知ることができた。

知られざる4つのなまはげ伝説 なまはげはどっからどぎっしやた？

「なまはげ」伝説の由来として、男鹿には個性的な諸説が伝えられているようだ。

その① “武帝五鬼”説

その昔、中国前漢の皇帝、武帝の五匹の鬼が村にやってきて悪さを働いたため、村人は鬼に赤神神社の五社堂までに1000段の石段を一夜で作れなければ、二度と村に来てはいけないという賭けを結んだ。

鬼が999段まで石垣を作ると、慌てた村人は鶏の鳴きまねをして、朝が来たと思った鬼は村から逃げた。村人は嘘がばれて鬼が再び来るのを恐れ、鬼に扮した若者にご馳走したのが祭りの始まり、と伝えられている。

その② “修験者”説

男鹿半島の真山と本山は神仏のご利益あらたかな場所、多くの修験者が過酷な修行をしていた。その修験者の姿をなまはげに重ね、修験者が里に下りたときにごちそうをしたのが、なまはげ神事の由来だと伝えられている。

その③ “山の神様”説

日本海に浮かんでいるように見える、男鹿半島の山々は山の神様が鎮座するところとして信仰されている。なまはげはその信仰の具現化であり、赤神様という神の使者として赤いお面を被ってやってくる伝えられている。

その④ “異邦人”説

なまはげの赤く彫りの深い顔、長い髪は船の難破により、遠い異国から漂着した外国人を表すという説も。①の説でもあった五社堂の石段は、彼らの持っていた滑車やロープで造られたとも伝えられている。

(参照:なまはげ館内の展示「なまはげ伝説」より)



一面に並ぶなまはげたち。
地域によって面の色や形が様々で恐ろしい顔を
しているものからかわいらしい顔のものもあった。

体感して初めて分かるなまはげ！

「今後100年、200年続いていくかはなんとも言えない」

なまはげ行事を体験できる「男鹿真山伝承館」

なまはげ館に隣接する男鹿真山伝承館は、男鹿の昔ながらの家屋にあり、大みそかのなまはげ来訪の体験学習ができる。編集部も参加し、赤面のなまはげに「悪いこはいねがー！」と詰め寄られたり、「学生かぁ、どこからきた？」と聞かれ、「東京から来たかあえれえきばれよお」と激励を受けたりした。浜松から吹奏楽の総文祭を見に来たというご家族に感想を聞くと、小学生のお子さんは「わらがたくさん落ちていて凄かった」と意外とあっさり。お母さんは「なまはげが戸とは別のところから入ってきて親の方が？驚きました」と笑う。お父さんは「拾ったわらはバックに入れてお守りにします」と語ってくれた。



なまはげに激励される編集委員

少子高齢化で今では村で子どもがいる家は2、3軒程。なまはげの行事は子どもがいないと盛り上がりがないと話す。継承者が少ないため、今後100年、200年続いていくかはなんとも言えない状況だという。「なまはげは秋田の伝統、地元の文化、日本の郷土文化。このまま廃れていってしまうのは悲しい。身体が持つ限りなまはげをやり続けていきたいです」と語ってくれた。(月・菊)

「うおおお泣く子いねアがー」と入ってきたなまはげにビックリしてしまつた。唸り声と見た目には想像以上に迫力があり、なまはげという文化を存分に体験することが出来た。

なまはげという存在は自分もとって『妖怪ウォッチ』などから知っていた。そのためなんとなく「なまはげは知名度が高いから後継ぎには困らないだろう」と考えていた。しかし、なまはげ館と男鹿真山伝承館を訪れ、なまはげも後継者問題や、少子高齢化について悩んでいることを知った。なまはげだけでなく、地方の文化をどう将来の世に引き継いでもらえののかについて考えるきっかけになった。今回の総文祭で他校の新聞部との交流や、地域の文化についてなどの貴重な体験をさせていただいた。この経験を新聞に還元していきたいと思う。(蓮)



悪い子はいねがー！

“なまはげ”になりきり中の編集部員
体験コーナーでは手持ちの面やケテを
使ってなまはげになれます！

石川さんは、「何もない原本からなまはげの顔が浮かんでくることですね」と彫師の魅力を語る。彫りは、全て人の手で行うとおよそ4日間、機械ではじめに大まかな形を作る荒削りをして半日かかる。

48年間なまはげの面を彫り続けている彫師の石川千秋さん。なまはげ館では日時限定だが館内で面彫りの実演を見学できる。今回、実演中の石川さんにインタビューさせていただいた。

22歳の時、父親のなまはげ面を彫っている姿を見てなまはげ面の彫師を志し、なまはげを彫り始めたという石川さん。小さい頃は、なまはげが家にやってくる大晦日が近づくのが怖かったが、今では子どもへの教育として、怖さも含めて継承していきたいそうだ。

面の怖さを引き出すために、目をつり上げることや黒目の入れ方に気をつけていると教えてくれた。

荒削りで大体の形ができたが左右対称かつ立体感が出るように、鼻の穴を開けたり顔を削って面を整えたりしていく。石川さんは家族で協力してなまはげ面を作っており、色付けは奥さん、馬の毛で髪をつけるのはお姉さんが担当されているとのこと。彫り、色付け、髪付けをしてなまはげは完成する。今、男鹿のなまはげ文化は継承する人があまり多くない(梅・桃)

石川さんは「子供の教育のために、怖いものがあればいいと思います。だからなまはげの人を継いでもらいたいです」と考えているそう。石川さんの今後の目標は、体が続く限りなまはげ面の彫りを続けていくこと。現在、千秋さんのなまはげ面を継承する人が一人いるそうで「石川面の顔立ちを将来へ継承してもらいたいです」と話してくれた。

男鹿「なまはげ館」で
なまはげ伝承を学ぶ

なまはげは、秋田県北西部に位置する男鹿半島などに伝わる伝承文化だ。「なまはげ」は、囲炉裏に長い間あたっていられる火ダコである「ナモミ(火斑)」を剥ぐ、ナモミハギという言葉が訛つたもの。ナモミは怠け者の証。そのナモミを剥ぎにくるなまはげは、怠け者を戒めるために山からやってくる神、来訪神であると伝えられてきた。

よく知られるのは鬼のような面をかぶる姿だが、実は地域ごとに多種多様な姿をしている。「なまはげせいぞろい」のコーナーでは、金銀の面、角のない大きな笑う鬼面など各地域に伝わるなまはげが一同に会しており、お気に入りを探することもできる。

共通するのはお面をかぶり、藁で作られたケテという衣装を着ることだ。ケテは毎年新しく作り、ケテから落ちた藁には無病息災、頭に巻くので、伝承館で拾ったケテを編集部員も頭にまかせていた。



ケテの藁を頭にまく編集部員

に登録されている。能登のアマメハギ、山形県遊佐町のアマハギはどちらもなまはげと同じように怠け者の火ダコ(アマメ、アマミ)を剥いでいく神様だ。

また、世界各地でもなまはげに似た来訪神が伝えられている。スロベニアのクレント祭りでは、人々がお面を被ってクレントになりきり、鐘を鳴らして冬を追い払う。なまはげ館では展示や映像で様々

《なまはげ館について》

男鹿のなまはげ文化や世界の来訪信伝承も学ぶことができるなまはげ館。JR男鹿駅から車で25分。入館料は小中高生は330円、大学生から660円。開館日は年中無休で8:30~17:00に入館することができる。

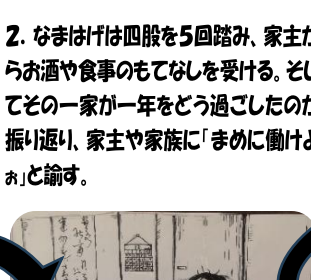


実際に顔につける面を彫る様子を見学。石川さんは「なまはげの怖さで一番重要なのは、目の入れ方なんです」と語ってくれた。飾り面の場合は黒目を描くそう。

大晦日の日にやってくる神様~イラストで見るなまはげ文化~



1. 外から足を踏みならす音と独特の唸り声が聞こえてくる。ドンドンと叩く音が聞こえたかと思うと襖が蹴破られ、なまはげが7回四股を踏み、部屋に現れた。暴れまわいながら「悪い子はいねがー」と家中で子どもを探す。



2. なまはげは四股を5回踏み、家主からお酒や食事の供えを受け。そしてその一家が一年をどう過ごしたのか振り返り、家主や家族に「まめに働けよ」と諭す。



3. なまはげは3回四股を踏み、山に帰っていく。なまはげが踏む四股には一家が次の年も健康に過ごせるように祈る意味が込められている。注)これは真山地区の伝承です。地区によって違いがあるそうです。

イラスト・菊ノ